□島袋敬一：**琉球列島維管束植物集覧** 794pp. 1990. ひるぎ社，那覇市首里石嶺町 1-127. ¥9,000. 原寛・日本種子植物集覧に感銘を受け，これと同じ形式で沖縄植物に関する資料をまとめ上げたものである．巻末の学名索引はシノニムまでひけるようになっており，県内の産地（島名），地方名，染色体数にもふれられている．原の集覧は未完であるが，これは維管束植物全部をカバーしている点で，本土植物についても利用でき，大変な労作である．基本的な違いは，原は文献のほとんどに目を通し，自己の意見として引用しているのに対して，これはそうでないものがかなりあるということを，著者自身が認めていることである．したがって，どれが著者の意見であり，どれがそうでないかがはっきりせず，とてももったいないと思う．この点，本書を利用する人が注意を払う必要がある．「データベース」としての観点からは，集覧の形式にとらわれずに，索引に徹した形式をとればよかったと思う．どんな索引かというと…学名（→和名)→出典，すべての形容語→それを含む学名，和名→学名→和名出典，植物名→植物図のある文献名，地域名（沖縄県内の)→所産植物名，植物名←→地方名…などである．自己のオリジナルな意見は，この中で適当な形式で表示すればよい．ワープロソフトや作表ソフトを使って仕事をする人は,パソコンのデータ処理機能をもっと利用したらよいと思う． （金井弘夫）

□森和男：**中国秘境に咲く花** 144pp. 1990. 新企画出版社，東京. ¥6,800. 山草家で最近は中国やヒマラヤ，北米に熱中している著者の，四川省の花のアルバム．草本とシャクナゲ類200種類ほどの春から初夏の花がカラー写真で示され，簡単な解説がついている．同定は大部分著者によるものなので，植物名に疑問のものもある．113頁からは峨眉山と松播高原の旅行記．あまり他人を意識しない独り言のような文章である． （金井弘夫）

□Watanabe M. and Malla S. B. (ed.): **Cryptogams of the Himalayas. Vol. 2. Central and eastern Nepal** 212pp. 1990. 国立科学博物館筑波実験植物園．非売品．1988年，国立科学博物館の渡辺真之氏を隊長として行われたヒマラヤおよび関連地域の植物調査のまとめである．主として中部ネパールのランタン，およびジュンベシ地域の，陰花植物に関する16編の研究が報告され， 対象となった植物群はラン藻，細胞性粘菌，菌，緑藻，地衣，コケ，シダにわたる．微生物，菌類などはまだ種を特定していく段階であり，今後もますます多くの植物群についてこのような調査がのぞまれる．シダになると染色体や成分の研究や分布図の作成までやれるようになり，ヒマラヤにおけるわが国のたび重なる調査結果の蓄積が思われる．希望者は渡辺氏に連絡されたい． （金井弘夫）

□Shibata S., Ohtsuka Y. and Saito H. (ed.): **Recent advances in ginseng studies** 148pp. 1990. Hirokawa Publishing Co., Tokyo. ¥15,450. 和漢薬の化学的研究は古くよりわが国の薬学者の重要課題としてとりあげられた．又漢方で用いられる生薬の薬理および臨床医学的な研究も広範に行われるようになったが，これらの生薬と生理活性，治療上での効果と成分の関係づけは今後とも一層の努力を必要とする課題である．特に古来よりニンジン（薬用人参）は薬としてよく知られていたが， 1960年より編者の一人柴田教授のグループにより本格的な解明がスタートする迄は不明の点が多かった．本書は1989年に開催された国際人参セミナーの会報として出版されたものである．第一部 薬用人参の栽培，カルス培養，含有成分では特に複雑な人参の化学成分が，科学機器，有機化学の進歩にともないめざましく解明されたことが注目される．第二部 薬用人参と脳では神農本草経に記述されている中枢神経系に対する作用の解明を含めて，記憶学習や摂食に対する影響，抗健忘作用，培養神経細胞に対する作用，中枢コリン系代謝賦活作用等の最新の成果が集められている．結びの薬用人参研究の今後の展望は編者の一人の30年以上の経験を通した極めて示唆に富むものである． （三橋 博）